

耳を傾ける

「耳を傾ける」「よく聞く」という言葉があります。最近では「傾聴」という言葉でよく知る方も多いかもかもしれません。僕自身、大切にしている言葉です。『LISTEN』（2021、日経BP）という本があって、その監訳を務めた篠田真貴子さんによれば、よく聞くことは、聞き手がいったん自分の判断を留保して、話し手の見ている景色や感じている感覚に意識を集中させる姿勢であり、話し手の語る内容を「私の考えと合っている・違う」などと自分の頭の中で判断しながら聞く姿勢ではありません。聞くことを通じて、私たちは、人を愛し、物事を理解し、成長し、周囲と絆を深めている。聞くとは、人間の営みそのものでもあるということです。

今号でお示した巻頭特集「アジアの学校に行ってみて・聞いて・感じること」や山形とベトナムの交流プログラムなど、現在、AEFAがすすめているあらゆる取組みを通じて、私たちが実感するのは、本当の意味での「耳を傾ける」ことの大切さ

です。この場合の「耳を傾ける」は、それこそ、耳（聴覚）だけではなく視覚や嗅覚、手触りなど、あらゆる感覚を用いて、現場の状況や相手を受けとめることを意味します。

大切な寄付をお預かりし、どの学校を選ぶのか、それをご縁といってしまうとそれまでです、現地のすべてを受けとめられるわけでもありません。だからこそ、現地のパートナーと一緒に、よく聞いて、よく見て、よく感じて、この学校といっしょにプロジェクトを進めたい、この学校に、日本からの大切な思いを届けたいと感じることができるようになっていきたいと思うのです。

おかげさまでAEFAは21年の歴史を積み重ねてきました。しかし、昨今の世界情勢の変化にあって、厳しい地域であればあるほど深刻な影響が顕れていることを痛感しています。こういう時こそ、あらためて初心に帰り、一つひとつ丁寧に、しっかり耳を傾ける、そんな努力を重ねていきたいと思えます。

7月5日（日）午後 AEFAフォーラム 開催

ポスト・コロナ、また、各地で続く紛争の影響がもっとも深刻なかたちで顕れている国・地域の一つであるラオスから、パートナーNGOのリーダーをつとめるノンさんとニャイさんをお招きします。私たちが関わってきたラオスの現地の等身大の現状をお伝えいただくとともに、子どもたちの未来のために何をしていくのがよいのか、皆さまと一緒に考える場としたいと思います。ふるってのご参加をお待ちしています。詳細は同封のチラシ、AEFAのウェブサイトをご覧ください。

AEFA マンスリーサポーター

募集中

AEFAの活動を継続的に支援して下さる「マンスリーサポーター」を募集しています。サポーターの皆様からのご寄付は、アジア山岳少数民族の子どもたちの可能性をひらく教育支援プログラムのために活用します。

金額（毎月）

月額 1,000 円（1口）から 5,000 円（5口）まで選択できます。

また、児童・学生の方々もご参加いただきやすいように、月額 500 円のプログラムも設定しました。

登録方法

寄付プラットフォームとして実績ある「Syncable」を使用しています。クレジットカード決済が可能です。

1. 右下のQRコードを読み取り、SyncableのAEFAページにアクセスしてください。
2. 「支援方法」より、「寄付する」を選択してください。
3. 「頻度」の欄で「毎月」を選び、「金額」の欄で月額を選択してください。
4. クレジット決済に必要な情報を入力してください。
5. 登録いただいたメールアドレスに Syncable からのメールが届きましたら受付の完了です。



<https://syncable.biz/>

Q「アジア教育友好協会」で検索



個人と非営利団体を繋ぐプラットフォームサービス
Syncable（シンカブル）に登録しています



<https://syncable.biz/>

Q「アジア教育友好協会」で検索

当サイト経由で AEFA 会費・寄付のカード決済ができます

AEFA Web & SNS

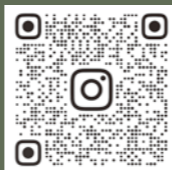
Web Site



Facebook



Instagram



私たちは各国のパートナーNGOと
手を携えて活動しています。

ベトナム：Research & Communication Centre for Sustainable Development (CSD)
ラオス：Association for Community Development (ACD)
タイ：Raks Thai Foundation (CARE Thailand)
スリランカ：Rotary Club of Colombo (RCC)



AEFAフレンズ会報

41号

2026年5月1日



特集

アジアの学校に行ってみて・聞いて・感じること
日越学校交流プロジェクト
ドクさんから学ぶ



AEFA アジア教育友好協会
Asian Education and Friendship Association

〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-3-22 アーバンセカンドビル 3F TEL：03-6265-6490 FAX：03-6265-6491

アジアの学校に行って 見て・聞いて・感じる

現在AEFAは、ベトナム、ラオス、スリランカで学校や図書館の建設、教育支援プログラムをすすめています。それぞれの国のプロジェクトを始めるまでに大切にしているのは、各国のパートナーと共に学校へ足を運び、子どもたち、先生たち、行政の人たち、村の人々に会うことです。学校を訪問することは、人に出会うことでもあります。出会いを重ね、話し合いを重ねる中で気づきやつながりが生まれ、プロジェクトが形づくられていきます。AEFAが訪問先でどんな人たちに会い、どんなことをしているか、その一端をご紹介します。

子どもたちの姿から見てくるもの

ベトナム北部のクートー分校を訪問したときのこと、学校の門をくぐると子どもたちがたくさん集まってきました。初めて見た外国人に興味津々のようです。すると、一人の男の子が英語で話しかけてきました。教室が足りないけれどがんばって勉強していること、たくさんの友達がいる学校に通えてうれしいこと、勉強が楽しいこと。校長先生からお話を伺う前に、学校のことが大体把握できたほどです。そのうちに、彼だけでなくほかの子たちも積極的に話しかけてきました(写真はP4)。

少数民族にはシャイな子が多いように感じていたので意外に思い、校長先生に理由を尋ねてみると、「ここは山岳部の学校ですが、世界に羽ばたけるように英語の時間を増やしています。そしてアート(芸術)の授業を行っています。言葉で自分を表現することに難しさを感じることも多い少数民族の子どもたちだからこそ、アートを通じて自らの思考を他者に伝える力を身に付けてほしいのです」と、よくぞ気付いてくれました!と言わんばかりの表情で答えてくれました。表現という日本語は、英語ではexpression、その動詞形のexpressには、心の中にある感情や考えを外に押し出すという意味があります。この場でまさに、expressionが実践されていると深い感銘を受けました。

スリランカ南部のある学校では、国の財政危機の影響によって建設が中断していて、2階部分は柱しかありません。工事中の影響で教室が足りず、子どもたちは狭い教室で学んでいます。そんな校舎ですが、子どもたちは丁寧に掃除をしていました。窓にはガラスもなく、金属の網があるだけ。土ぼこりが容赦なく入ってきます。それでも、訪問者である我々を気にする様子もなく、子どもたちは右から左、奥から手前と、手馴れた様子で、箒で丁寧に掃いていきます。



左) 日本の浴衣でお出迎え 右上) 2階の建設が中断した学校 右下) 丁寧に掃除中(スリランカ)



左上) 村での話し合い 右上) 学校の養魚池 左下) 学校菜園 右下) 先生たちとよく話す(ラオス)

この学校は、2階部分の工事を再開して学校を完成させたいという希望がありましたが、以前の工事から時間が経っていて経年変化が懸念され、また、工事の経緯や躯体の状態もわかりませんでした。そのまま2階を建設して、万一にも倒壊してしまうようなことがあってはいけませんので、敷地内の別の場所に新しい校舎を建設することにしました。

丁寧に掃除をしていることは、ベトナムもラオスも同じです。特に乾季は風で土ぼこりが舞い、どんなに掃除をしてもすぐに汚れてしまいます。掃除用の水が十分に入手できる学校ばかりではありません。そんな状況であっても、一心に掃除する子どもたちの姿からは、学校を大切にする気持ちが伝わってきます。

地域を支える学校、先生たちのがんばり

山岳地帯には、畑や養魚池を持っている学校があります。そこで育てられた野菜や魚は、子どもたちの食事になります。一般的に、ラオスやベトナムの山岳少数民族の子どもたちは栄養不良・栄養不足から、背丈も体格も小さい傾向にあります。寄宿舎のある学校では、栄養のバランスを整えた3度の食事は子どもたちの命を支え、成長の基礎になります。毎日、24時間、子どもたちを見守り、育てる先生たちの尽力はたいへんなものです。授業以外にも、日々のあいさつ、寮の中の整理整頓、少数民族の子どもたちが苦手な国語の補習、水浴びのための湯沸かし・・・、校長先生や先生たちのさまざまな工夫、日々の努力によって、子どもたちが守られ、育てられています。

ベトナムの学校では、とれた野菜や魚を地域の困窮家庭に配

ることもあります。村人の日々の暮らしを支える学校は、地域において求心力をもつようになり、発信力も高まります。こうした学校の校長先生は視野が広く、日々の子どもの教育から地域の未来まで考えていて、村人からも信頼されています。

学校が地域を支える存在になることは決して簡単なことではありません。こうした、子どもたちの現在だけではなく、未来のことまで考え、日々実践している先生たちの工夫や努力をしっかり受けとめたいと思うのです。

日本ではなかなか想像しにくいかもしれませんが、子どもたちが10歳くらいになると、生活の厳しさから「学校に通うよりも家の仕事の手伝いをすべき」と考える親もいます。ラオスのある学校での出来事です。校長先生が見せてくれた学年別の子どもたちの数を示した表では、男の子も女の子も4年生くらいになると人数が少なくなっていました。村長や村の大人は「子どもが働くのは仕方がない。少しでも学校に行けただけまし。自分は学校なんてまったく行っていないよ」と、あきらめ顔です。

そんな中でも、校長先生は、時間を見つけては親たちが働く畑に向いて、どうして子どもが通学しないのかと親たちの話を聞き、教育の大切さを伝え続けています。子どもたちがいま学ぶことの大切さ、それが将来につながることを、なかなか理解されなくてもあきらめずに何度も・・・。

「自分にはそれしかできません。それでよいのですかね?」と問う校長先生に、「私たちが同じことをすると思います。結果はいつれついてくるのではないのでしょうか」と答えました。この時の校長先生の、なんともいえないほっとした表情が忘れられません。

この学校には、ラオス語のアルファベットを覚えるための教材を日本の支援者が手作りして届けるなど、応援を続けています。

一人ひとりのつながりから始まる

アジアから日本で働く人が増え、アジアの人々にとって、日本は以前よりも近い国になってきています。とはいえ、私たちが訪問するのは山岳部の村々です。子どもたちはもちろん、先生たちにとっても、おそらく私たち自身が彼らにとっての、初めて出会う外国人でしょう。

遠い日本から会いに来てくれてありがとうと、学校の周りで摘んだ花束を渡してくれる子どももいます。そつとあとを付いてきて、私たちの様子をじっと見ている子どももいます。こちらが何かするとドッと笑い声がわきおこることもあります。笑顔に笑顔で返すことで、段々と打ち解けていきます。もしかすると、こんな風にさりげなく目と目が合う瞬間こそ、プロジェクトを一緒につくっていくための出発点なのかもしれません。プロジェクトはお互いのことを思い合う気持ち、一人と一人のつながりを大事にすることから始まります。

行って見て、聞いて話して、わかること

こうした出会いの積み重ねが、AEFAの多くのプロジェクトを支えてきました。一方で、支援を見送らざるを得ない学校も少なくありません。

ある地域では、校長先生は校舎の古さと地域の困窮を懸命に訴えていて、確かに校舎の再建が必要な様子が私たちにも見て取れました。ただ、校長先生と地域の教育行政の担当者の話が食い違っています。詳しく聞いてみると、校長先生はこの地での学校存続を前提に話しているのに、教育行政の担当者は近隣の学校との統合を考えていて、しかもどちらを選択するのかも未定だということが明らかになりました。

もちろん各国のパートナーNGOが事前に調査をしていますが、こうした行き違いは、外部の人間である私たちが訪問して対話することによって、初めて判明することも少なくありません。そういう意味でも、実際に先生たち、行政、家族など、かかわる人たちの声を聞き、地域の成り立ちの背景を調べ、子どもたちの日々の生活などを可能なかぎり見るという基本的なことこそが大切です。様々な面から実情を掘り起こして理解することで、プロジェクトがより実り多いものとなると信じているからです。

世界が大きく揺らぐ今こそ、愚直に努力を重ねる

そのような経緯を経てせっかく始まったプロジェクトも、現地の政府の方針転換や人事異動に翻弄されることや、自然災害や社会情勢の悪化によって中断してしまうこともあります。さらに、今、世界で起きている気候変動や紛争や戦争のしわ寄せは、社会の最も脆弱な部分に向かいます。たとえばラオスの山岳地域では、経済危機の長期化、さらなる深刻化により、「まず

食べること」が優先され、中高生が学校を離れて働きに行かざるをえないような状況が広がっています。

こうした時こそ、パートナーNGOをはじめ、プロジェクトを通して出会った一人一人とのつながりを支えに、共に最善の道を探り続けることが重要です。

ラオスについても、「今、一番必要な活動はどんな活動か」をパートナーNGOと検討を重ねた結果、児童の栄養改善を目的としたプロジェクト(リトルシェフ)や、学校を魅力的な場所にするため、児童や生徒たちにとっての大切な居場所となっている図書館プロジェクトをすすめています。

AEFAは、子どもたちの心身の健全な成長、そして、子どもたちが自らの将来の可能性を上げ、人生を自分らしく生きる力を育むことに寄与すべく尽力してきました。激しい変化にさらされ、社会の分断が進む今だからこそ、それぞれの現場の現在と未来をしっかりと見つめ、彼らに必要なことを探求し、さらなる取り組みをすすめていきたいと思えます。



ようこそ私たちの学校へ(ベトナム)

2025年度より国際交流基金の特定寄付金制度の対象となりました。対象プロジェクトでは、寄付金の税額控除のメリットを受けることができます。くわしくは事務局にお問い合わせください。

AEFA プロジェクト

Now 2026年3月末現在

学校をつくる、ととのえる

国名・学校名・支援者名(敬称略)を記載しています

完成	スリランカ ランミヒタンナ小中学校 エルセラーン1%クラブ	南部州にある、先生たちの熱意と児童生徒の学習意欲が大変高く地域との協力関係が深い学校です。AEFA訪問時には、生徒たちがとても丁寧に清掃をしている姿が印象的でした。2教室の新校舎を建設しました。
完成	スリランカ スリロハナ小中学校 エルセラーン1%クラブ	南部州の経済的に大変厳しい地域にある学校です。同じ地域のAEFAプロジェクト校の先生から、大変熱心に教育に取り組んでいるが教室不足で困っている状況をお聞きし、2教室の新校舎を建設しました。
完成	ベトナム フアプー分校 アジアの子供たちに学校をつくる議員の会	タインホア省山岳部のラオス国境に近い地域です。2~5年生児童は10キロ離れた本校へ通い、1年生は村の幼稚園に間借りして学んでいました。2教室+教員室の新校舎及びトイレ棟が完成し、新しい校舎で勉強を始めています。
建設中	ベトナム ドイホン分校 株式会社カナオカ	中越戦争当時戦火から逃れてきた人々が集住する地域で、8つの民族の子どもたちが学ぶ学校です。年々児童数が増え、老朽化した校舎は危険で使用できないため教室不足となっています。4教室の新校舎を建設しています。
移転先調整中	ベトナム サマン分校 一般社団法人 ゼブラ社会貢献支援協会 (ZESCO)	ラオス国境近くの山岳地域にある学校です。2025年9月台風による地滑りで被害を受け、今後の被害拡大への懸念もことから村全体の移転が決まりました(村人や子どもたちは無事でなによりでした)。村の移転に合わせて学校も新設するため、用地確保などを含めて建設計画を見直しています。読書プログラムは前倒しで開始し、子どもたちの学びの充実をすすめます。
申請中	ベトナム ホンクアン少数民族寄宿小中学校 株式会社ディアーズ・ブレイン	200名以上の児童生徒が、寮で生活しています。学校統合の影響で寄宿舎が不足し、1つのベッドに3人がすし詰めで眠っています。トイレと水場付きの寄宿舎を新設して、生活・衛生環境を改善します。
募集中	ベトナム クートー分校	山岳部の経済的困難を抱える地域にある学校ですが、通常のカリキュラムに加え、子どもたちに自分自身を表現することを学ばせたい、とアートや英語のクラスも行われています。児童数が増えることが見込まれるため教室の増設と、さらなる教育の質の向上のための専科教室の建設を計画しています。
募集中	ラオス ナカロン小学校	サラワン県ラオガム郡にあります。今の教室は老朽化して危険な状態で、最も優先度の高い学校です。2教室+教員室が必要です。P6写真①
募集中	スリランカ セント・ヨアチム タミル学校	紅茶プランテーションに囲まれた学校で、保護者もプランテーション関係の仕事についています。学校は「時代に合わせた教育・道徳的人格と現代における課題解決に立ち向かえる理想的市民を育てる」を理念に掲げ、学業もクリケットなどのスポーツ等の行事も大変盛んに行われています。
募集中	スリランカ バーラティ学校	中部州ヌワラエリアにある、茶園に囲まれた学校です。タミル人の子どもたちが小学校から高校まで学びます。学校の運営には、保護者をはじめ支援者が協力しています。



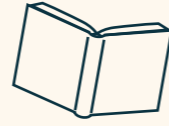
上)クートー分校の子どもたち 左下)民族衣装と日本の国旗で歓迎 右下)学校での話し合い (ベトナム)



募集中のプロジェクトは、みなさまのご寄付をお待ちしているプロジェクトです。詳細は、お気軽に事務局までお問い合わせください。

図書館をつくる、本に親しむ

図書館を建設して本や本棚をそろえ、1年間の読書活動を支援します。図書館を建てた後、読書習慣を身につけるための多様な活動を行い、子どもたちの成長を1年間見守り応援します。



完成	ベトナム ルンゴアイ小学校 エルセラーン1%クラブ	少数民族ムオン族の児童が98%以上を占める学校です。読書活動は、少数民族の子どもたちにとって、公用語であるベトナム語の学習にも大変役立ちます。図書館は1月に完成し、読書啓もう活動を開始しています。
完成	ベトナム ルンニエム小学校 エルセラーン1%クラブ	AEFAプロジェクト支援校で本に親しむ活動に取り組んでいた先生が、新たに副校長として赴任した学校です。図書館と読書活動を通じた子どもたちの変化を実感したことから、新しい赴任校の子どもたちにもぜひ活動を経験させたいとの希望がありました。図書館は1月に完成し、活動が始まっています。写真②
完成	ベトナム アムヒウ分校 株式会社ディアーズ・ブレイン	少数民族タイ族の児童が97%を占める学校です。図書館とトイレ棟を新設、読書環境と衛生環境を整備しました。2025年12月に日本から支援された方たちが参加して、開館式と交流会が開催されました。
完成	ラオス スクサムパン中高校 エルセラーン1%クラブ	南部チャンバサック県にある地域の中心となる学校です。以前、ACD(ラオスNGO)による教育支援プロジェクト「環境啓もう活動」にも生徒が主体となり熱心に取り組みました。2026年3月、図書館が完成しました。
申請中	ベトナム ティップダオ分校 阿部 佳世子	ベトナム東北部の山岳部にある学校で、ザオ族とモン族の子どもたちが約9割を占めます。図書館と読書の活動は、少数民族の子どもたちにとって、公用語ベトナム語を学習するために役立ちます。読書活動とともに、STEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics) を実践的に学んでいきます。
申請中	ベトナム ジャオアン小中学校 エルセラーン1%クラブ	ムオン族・タイ族など少数民族の児童生徒が98%以上を占める学校です。現在の図書室は、小中校用に各約12㎡の小さな部屋しかありません。読書するためのスペースがないので、屋外のスペースを活用するなど工夫して読書を行っています。
申請中	ベトナム ジャオティエン小学校 エルセラーン1%クラブ	ムオン族・タイ族の児童が多く学ぶ学校です。先生たちは、子どもたちに本の世界と読書を通して考える力や想像力や創造性を養ってほしいと願い、協力を約束しています。
申請中	ラオス オンノイ中高校 エルセラーン1%クラブ	南部サラワン県にある学校です。近隣の7つの村から約150名の生徒が学ぶ地域の中心基幹校ですが、図書室はありません。図書館が出来れば、生徒が「図書ボランティア」として、先生と一緒に貸し出し簿や図書館の利用ルールを作るなど、主体的に活動しています。
募集中	ベトナム ドンルオン小学校	タインホア省の山岳部にある学校で、ムオン族・タイ族・チュット族の子どもたちが学んでいます。現在は、30㎡ほどの小さな備品室を図書室としても使用していて、読書するスペースがありません。司書のHuyen先生によると、各クラス週に2回ずつ読書を行っています。創造的な読書活動は行うことが出来ていません。写真③
募集中	ラオス ダシア中高校	南部サラワン県にある学校です。近隣4村から約180名の生徒が通う地域の基幹校ですが、図書室はありません。先生たちは、子どもたちの学びと学校活動を充実させるため、図書館を強く希望しています。

子どもと若者の自立をささえる

継続が大切な案件のため、ご支援を引き続き募っています。



実施中	ラオス リトルシェフ(栄養改善) Junta Coffee	現金収入の手段が限られ生活が厳しい山岳地域の村では、栄養不足により幼児や子どもの発育が遅れていることがデータからも明らかになっています。学校菜園・養魚池等を設置し、栄養と保健衛生について学び、調理実習を行う「リトルシェフ」は、子どもたちが周囲の大人たちと協働しながらリーダーシップを発揮する教育支援プロジェクトで、かつ、食糧と栄養の補給にもなります。
募集中	ラオス 先生基金 小牧修 国際ソロプチミスト伊勢原 小林弘英 中村洋子 匿名	先生や生徒の生活支援のための養魚池を校庭に作る資材や稚魚購入の資金援助、給料が出なくても子どもたちの為に教えているボランティア先生への支援、教員養成校や大学で学ぶ者たちへの支援などが、経済危機が長期化する今、ラオスで最も必要とされています。
募集中	マレーシア CSO学校運営支援 水野恵子 服部駒子 野口豊子 Selesalah Yoga	Chin Student Organization (略称CSO)は、ミャンマー北西部チン州の山岳地帯から、国軍による弾圧や武力衝突を逃れてきたチン族難民の若者たちが運営する、マレーシアにある学校です。設立21周年を迎えました。これから子どもたちの学びたい、を支えるため継続的な支援が必要です。



①ナカロン小学校の子どもたち



②ルンニエム小学校 図書館



③ドンルオン小学校の現在の図書室

日越学校交流プロジェクト「フレンドシップサークル」 つながり続ける学びの輪

互いの「大切」を伝えあい、認め合う時間。そうした小さな積み重ねが、これからの社会を支える力になるのではないのでしょうか。AEFAでは、その願いを込めて、皆さまのご支援のもと、単発ではない「継続的な交流」を重ねています。



ベトナム語に訳された手作り本

はじめりは、2024年の山形訪問

AEFAは2024年7月、山形で国際交流活動を行っている山形県IYEO(山形県青年国際交流機構)の皆さんとともに未来の図書館について考えるワークショップを開催し、ベトナムのパートナーNGOであるCSDのアインさん、マイホアさんをお連れしました。その際、山形の都市部にある山形市立南小学校と山間部にある小国町立小国小学校を訪問しました。子どもたちや先生たちと温かく触れ合い、授業や図書館活動を見学したことなどから、AEFAもCSDも多くを学びました。その後、マイホアさんから「日本の子どもたちとベトナムの子どもたちが直接交流する機会をつくりたい!」と提案があり、半年間という比較的長い期間、オンラインを中心にクラス単位で交流する「フレンドシップサークル」プロジェクトが生まれました。

2025年10月より活動がスタート。初年度はパイロットプログラムとして、南小学校4年2組とトゥエンクアン省クアンチュン小学校4年B組、寒河江市陵南中学校1年生とバクニン省ニンソン小学校5年G組が交流を行いました。

テーマの設定はAEFA/CSDで行うつもりでしたが、実際には毎回「こんなことがしたい」と学校の皆さんから提案していただけたのは嬉しい誤算でした。ひとたび交流を始めると、先生たちからも児童たちからもどんどんアイデアが生まれてくるようでした。例えば2月に行われたオンライン交流では、南小学校は「十歳を迎える会」とそのために準備していた歌を紹介しました。クアンチュン小学校はベトナムの旧正月「テト」について衣装や食べ物、遊びなどを伝えてくれました。ベトナムの遊びに刺激を受けた南小からは「日本の遊びを紹介したい!」と、急遽クラス全員が百人一首に取り組む様子を披露してくれました。毎回子どもたちの中から伝えたい思いがあふれてくるのを感じます。自分たちの「大切」を全力で伝え、相手の「大切」に身を乗り出して聴き入り、見入る。その真っ直ぐな姿に、間に立つ私たちも胸を打たれます。

ベトナムを訪問し対面交流

今年度は、前年度お世話になった山形の先生たちがベトナムに赴き、交流校2校を訪問しました。初めに訪れたニンソン小学校では陵南中学校の生徒たちが作成し寄贈した「日本・山形紹介英語カルタ」で5年G組の子どもたちが遊び、大盛り上

がり。クアンチュン小には、南小の子どもたちが手作りした日本の昔話や折り紙の本が届けられました。子どもたち自らベトナム語に訳して書かれていたので、大変驚かれ、喜ばれました。

両校で、伝統文化交流も行われました。ニンソン小ではバクニン地域の文化遺産である「クアンホー民謡」を地元の女性たちと一緒に歌い、クアンチュン小ではタイ族の「テン民謡」や伝統楽器・料理を教えてもらいました。子どもたちにとっては、地域の文化の素晴らしさを改めて認識する機会になっていました。日本の先生たちは、お返しに浴衣を着付けて花笠音頭を紹介し、皆熱心に練習してくれました。ベトナムの小学校で、全校の皆の息がぴったり合った花笠踊りを見るのは壮観でした。

対面交流では、両校とも工夫を凝らした準備をしてくださり、大変な充実ぶりでした。夕方になるころには日越の先生たちどうし打ち解けてお話も弾んできたのですが、残念ながら時間切れ。次回は先生たちがゆっくり語り合う時間も確保したいというのが反省点です。

コミュニケーションの第一歩は、まず、自分が大切にしているモノやコトに気づくこと。そして、相手のそれにも目を向け、耳を傾け、尊重すること。そんな、人間としての基本のキを、この活動に参加している子どもたちからあらためて教わっているように思います。時間をかけて交流することにより、より深く広い、自然なつながりが醸成されるといいなと願っています。

※このプロジェクトは、一部一般財団法人MRAハウスの助成を受けて実施しています。



南小学校とクアンチュン小学校のオンライン交流

ドクさんから学ぶ

昨年11月25日、グエン・ドクさんをお招きして、「映画『ドクちゃん〜フジとサクラにつなぐ愛〜』を鑑賞し、ドクさんと対話する会」を、AEFAの学校建設に長年にわたりご協力いただいた「アジアの子供たちに学校をつくる議員の会（会長：遠藤利明元オリパラ相）」との共催で開催しました。AEFA会員やベトナムでの学校建設にご協力いただいた方々を中心に約60名にご参加いただきました。

グエン・ドクさんは、1981年、ベトナム戦争で米軍が使用した枯葉剤の影響によって、兄のベトさんと共に結合双生児として生まれました。7歳の時に、兄のベトさんが左足、ドクさんには右足を残しての分離手術が行われました。ベトさんは2007年に亡くなってしまいましたが、ドクさんは、その後、入院や通院治療を重ねながら、妻、双子の息子さんと娘さん、そして、闘病中の義母さんを介護しながら、ベトナムのホーチミンにおいて、5人で暮らしています。息子さんはフジ、娘さんはサクラ、手術などでお世話になった日本に対するドクさんの深い思いが子どもたちの名前に込められています。

映画は2024年に公開されました。撮影当時、ドクさんと妻のトゥエンさんとは結婚して18年、フジくんとサクラさんは中学生でした。映画に映し出された一つひとつの場面から、ドクさんの仕事ぶり、つらい治療、家族の何気ない会話、日々のご飯といったドクさんたち家族の日常を垣間見るとともに、ドクさんがこれまで歩んできた道のりを実感することができました。



左)これから会が始まります 右)会が終わって東京駅にて

日本では有名なドクさんですが、毎日の仕事は病院での事務、重い障がい者を伴っているからといって特別扱いはありません。バイクに乗って仕事場に通い、たくさんの仕事をこなして家に帰ってくればクタクタ、身体の中に入られたドレーンが動いてしまうととても痛いのですが、娘さんが手伝って直し、マッサージもしてくれます。子どもたちはこれから高校や大学に進学していきます。ますます学費もかかりますから、がんばって働かねばなりません。家族のために毎日を懸命に生きること、そして、家族の未来のためにこれからも生き続けること、ドクさんの家族を思いやる強く温かい気持ちが伝わってきます。(家族の状況などはいずれも撮影当時)

映画では、深い葛藤も含めた、ドクさんの心の内面についても描かれていました。結合双生児であることを世間に隠した実の父や母との不仲、厳しい治療を支えてくれた看護師さんへの感謝、そして、天国にいる兄ベトさんへの思い…。

ドクさんは、仕事を続けながら、自らが歩んできた道を語ることを通じて、戦争の被害の深刻さ、そして、自分を生かしてくれ

逆境をたくましく生き続ける姿に勇気をいただき、命の尊さを深く考える機会となりました。(遠藤利明さん 議員の会代表)


ドクちゃんの心からの声に直接触れることができ、深く考えさせられました。私はこれまで都市開発にかかわる仕事を通じ、誰もが平等にアクセスできる「インクルーシブな開発」の重要性を発信してきましたが、今回のお話からたくさんの新しい気づきをいただきました。(ATさん 開発コンサルタント)

低く、良く響く声のドクさんの言葉は、どれも胸に染み込みました。やはり現実のお話をするのが何よりも説得力があると思いました。強い意志を持たれて何事も自分でやっていたら、その精神力に、とまかく驚嘆しました。(MKさん 翻訳家・エッセイスト)

ベトナムの医療や枯葉剤被害、障がい者を取り巻く課題は非常に複雑で、簡単に解決できるものではないと思います。でも、だからこそ、今ある状況を伝え、声を上げていくことこそ、すごく大切ですね。(TYさん ベトナムにて雑貨店経営)

ドクさんのポジティブさ、生や信念に対する情熱、心の優しさや温かさがひしひしと伝わってきて思わず涙が出た。逆境に立った時や辛い時こそ、私も彼のように強さと優しさをもって懸命に生きていきたい。(SRさん 大学生)

会場の声から



た医療技術を提供した日本への感謝の気持ちを表現しています。映画もその一つです。

映画を鑑賞したあとは、ドクさんのお話に耳を傾けました。

2025年はベトナム戦争終結50年でした。戦争による深刻な影響を受けた当事者であるドクさんは、平和を願う一人の市民として、戦争がもたらすことの深刻さを伝えています。

ベトナム国营放送局が運営するVOVworldによれば、米軍がベトナム各地に散布した猛毒のダイオキシンを含む枯葉剤を浴びたベトナム人は480万人、その被害者数は300万人を超えるとされています。しかし、ベトナムにとって戦争の負の記憶の一つのかたちでもある枯葉剤の被害者への救済や支援は十分ではありません。

映画では、深刻な被害地域において、被害者の救済を訴えるドクさんが、松葉杖をつきながら、何階も上の事務所まで懸命に上がっていく姿がありました。そんな姿からも、その対応の実態が垣間見えます。

それでも、ドクさんは諦めません。平和の大切さを世界に訴え続けています。直接お会いして、その声に接して実感するのは、かならず平和な世界にしていかなければならないという、強い覚悟と使命感です。

ドクさんといえば、枯葉剤による結合双生児、長時間の分離手術、残った右足と松葉杖・・・といった面ばかりを見てしまう人も多いかもしれません。しかし、今回、直接お会いして実感したのは、ドクさんの等身大の魅力あふれる姿です。いま、誰もが感じている先行きの見えない不透明な社会を生きる不安とこれを乗り越えようとする日々の努力、二人の子どもを持つ父親としての責任感、そして、懸命に生きているからこそその人を引き付ける魅力あふれるドクさんの姿を実感しました。屈託のない、愛嬌ある笑顔は、厳しい治療を続けながらも、家族の深い愛情に包まれてきたからこそその賜物で、ドクさんそのものです。

ドクさんと語る会は、AEFA理事の坪井さんがドクさんと親しく交流してきたこと、そして、ドクさんの日本語通訳を務めている、そのご縁によって実現できました。突然のお話で、幅広いお声掛けができなかったのは申し訳ないことでした。今後、もっと多くの方々にドクさんとお会いいただく機会を持ちたいと思いますし、なにより、僕自身、また会いたいと心から願っています。

AEFAは、国境を越え、異なる背景を持つ人たちが相互の様々な交流活動が続けてきました。生きることに深く向き合うドクさんが語る姿、そして、その言葉は、私たちの心を揺さぶるもので、これこそ、交流の意義そのものと考えています。今後も、こうした意義ある交流を続けていきたいと思えます。

(亀井善太郎)



プロデューサー
リントン貴絵ルースさん

ドクさんに初めてお会いしたとき、私は「枯葉剤をまいたアメリカのことが憎いですか?」と尋ねました。ドクさんは「そういう問題じゃないんだ。アメリカ人も僕と同じように平和を愛している」と答えました。その言葉は私の心を震わせ、胸の奥に「想い」の芽を生み出しました。それから10年以上が過ぎ、ロシアがウクライナに侵攻を開始したとき、私は今こそ彼の声を世界に届けなければならないと決め、ホーチミンへ飛び映画への出演を依頼しました。

撮影で彼は言葉通りすべてをカメラの前でさらけ出してくれました。そこには、80年代に日本のメディアでも多く報道された「ベトちゃんドクちゃん」の弟ドクが、過去を背負いながらも今を前向きに生きる真の姿が映っています。

この映画が、ドクさんが平和のメッセンジャーとして生きる道の伴走者となることを願っています。そして同時に、出逢いによって交わる一つひとつの想いが重なり、やがて奇跡さえ起こし平和を実現させる力になると信じています。



ドクさん主演の映画「ドクちゃん〜フジとサクラにつなぐ愛」は、販売中のDVDのほか、Amazonプライムビデオ、U-NEXTなどでも配信中です。ぜひご覧ください。

■自主上映と平和教育プログラム実施中!■

申し込み&お問い合わせは下記公式サイトから

<https://dokuchan-movie.com/news/info/>

対話の力

AEFA理事/建築家 佐川 旭

まちづくりの仕事をしていて最も難しいのは、地域に関わる団体や住民との合意形成を図る上で、いかに円滑に話し合いを進めて行けるかという点になります。発注者が一人であれば、その人自身の考え方を聞き目的や課題を明確にすることで合意に向かいます。しかしまちづくりのような仕事は関係者間での意見は往々にしてバラバラで、全員の理解が得られるにはかなりの時間を要します。

合意形成を図るために場面に依りて議論を促すことや意見を引き出すこともあれば、時には相手を尊重しつつ相手の主張を誠実に伝えることも必要です。

そこで気づくことは議論と対話の使い分けです。

議論は問題解決や意志決定、結論を導き出すことを目的としたコミュニケーションです。特に白黒をつけたり、どの主張が正しいかを決めたりする場面ではとても有効です。



ラオスの村にて

一方対話はお互いの考えを深く掘り下げ新たな理解や洞察を得ることを目指すコミュニケーションです。意見の正誤は問わず相手の意見の背景や意味に注目し相互理解を深めることを目的としています。

まちづくりにおいてはこれらの違いを認識し柔軟な姿勢で進められないと合意形成の着地点を見出すことは難しいです。そしてこの考え方は私たちNPOスタッフも心掛けています。

たとえば複数の村から我が村に学校を建ててほしいという要望があった場合、私たちのスタッフは村民との対話や現地NGOとの対話を大切にしながら候補地を決定しています。それぞれの村の持つ課題や環境を知ることにより近隣周辺の村へ及ぼす波及効果や子供の就学率、さらには親の学校への理解度など様々な視点を持って決めていきます。そしてそのような経緯を経ることで寄付者に対しても、私たちが自信を持って説明することが出来るのです。海外での支援活動を通して気づかされるのは、異なる言語を理解するだけでなく対話を重ねる中で、その言葉の背景や心情など少しでも相互理解が深まる方向を目指すことも大切であるという事です。

私たち日本人は察し合う文化でコミュニケーションを成立させてきました。そこで培われた調整力は議論ではなく対話を進める上で確かなスキルとなってくれるのです。今後も対話の力で私たちは現地NGOとの連携を深め、共通の目標達成のために活動を続けていきます。

杉並区西荻地域区民センター主催

谷川洋講演会 開催

12月7日、会長・谷川洋の講演会「東南アジアの子供に教育を〜第二の人生を学校教育に捧げる」が杉並区西荻地域区民センター主催で開催されました。アジアの現場の写真を紹介しながら、学校や村での胸が熱くなるようなエピソード（谷川語録では「ウルルン!胸きゅん!」）や、活動するうえで苦労していることをお話ししました。

地域の方を中心に、20代からシニアの方まで幅広い年齢層の約40名が参加され、「谷川さんの熱意が波紋のように重なり合い、うねりを起こしていると感じた」「同年代なので、親しみを感じる。地元でこういう活動をしている人がいる



と知らなかった。何かの形で手伝いたい」「杉並区の小学校で講演してほしい」等多くの感想や申し出をいただき、さらにNPOの活動にも参加する一歩につながりました。

坪井未来子の

ベトナム遠景・近景 ⑥



価値観の違いのおかげで 世界は驚きに満ちている!

「価値観の違い」って、わりと「めんどくさい」もの…って感じているの、私だけでしょうか？ けれど最近、AEFAの交流活動に携わる中で、少し考えが変わりました。価値観の違いがあるからこそ、私たちは驚き、発見し、自分の見方を問い直すことができるのではないか、と思うようになったのです。「当たり前」が当たり前ではないと知る過程で、自分自身の先入観や価値観に気づきます。ほんの少し見方が変わることによって世界がまるで違って見えることもあります。今回は、そんなことを考えさせてくれる交流活動参加者たちの声をご紹介します。

☆ベトナムを訪問した先生



◆丸川裕太郎先生

(2024年度山形県小国町立小国小学校 6年生担任、日本での交流受け入れ担当)

「What's your name?」

クアンチュン小学校で出会った少女は、少し緊張した面持ちで英語で話しかけてくれました。「I'm Maru-chan!」と答えると、彼女の目はぱっと輝きました。「伝わった!もって自分の言葉で伝えたい!!」という熱い思いが、そのままざしからまっすぐに伝わってきて、私の中の問いを静かに揺さぶりました。——私たちは、なぜ学ぶのか。学びの先に何かがあるのか。子どもたちに「学ぶ意味」を実感させる力を持っているこんな体験を、より多くの子どもたちにさせてあげたいと思いました。



◆福島彩子先生

(山形県寒河江市立陵南中学校 外国語非常勤講師)

「大切なのはカタチではなく心ですから」

訪問先の先生方やマイホアさんのご家族からいただいたこの言葉は、強く心に残っています。自然体で受け入れてくださる姿に触れ、英語学習もまた、相手を思う心を伝える手段なのだと思えて気づかされました。また、ベトナムの教室では好奇心に満ちたまなざしに出会い、安心できる学びの場があってこそ子どもは輝くのだと実感しました。今回の経験を胸に、言葉の向こうにある「心」を大切に英語教育を、これからも子どもたちに届けていきたいと思えます。



陵南中学校・ニンソン小学校、オンラインによる交流

☆オンライン交流、対面交流した学校からの声

◆クアンチュン小学校の児童(オンライン)

特に印象に残ったのは、10歳の節目を祝う行事です。自分の成長を認める瞬間であり、みんな誇らしい気持ちにあふれているようでした。歌やピアノ、笛の演奏も、伝統的な遊び(百人一首)もすごく上手で驚きました。

◆クアンチュン小学校のファム先生(対面)

普段はなかなか集中できない児童も、日本の先生たちに教わるということで、とても集中し、授業に引き込まれていました。ご両親も大変驚き、喜んでいらっしゃいました。

日本の先生たちの優しい物腰、スピーディーで楽しい授業に、私たち教員もすっかり魅了されました。

◆ニンソン小学校の児童(対面)

花笠踊りを通して、日本文化の美しさ、しなやかさや繊細さ、団結の精神を強く感じました。日本についてもっと知りたいです。この授業を通して自信が付き、日本に行きたいという新しい夢が生まれました。

日本語で色について教えてくれる授業がすごく楽しかったです。花笠踊りも大好きです。先生たちがとても恋しいです。

◆南小学校の富田先生(オンライン)

質問タイムがとてもよかったです。一方的に発表するのではなく、子どもたちどうしのやり取りから自然な交流が生まれました。

◆陵南中学校の生徒(オンライン)

自分が書いたカルタの読み札を読んで、自分のカードをニンソン小学校の子が画面の向こうに持ってきてくれた時のあのドキドキ感にははかり知れません。

カルタやプレゼンテーションを通して、相手の文化に興味を持ちました。もっと知ろうとすることで、よりコミュニケーションを取ろうと頑張れる気がします。

出会いから生まれる驚きや学びは、時に戸惑いもはらみつづ、私たちの教育観や日常をやさしく揺さぶってくれます。国や文化の違いが強調され、世界や社会が分断されやすい今だからこそ、互いの「心」に触れるこうした体験を子ども時代に重ねる意義は一層大きいと感じています。その積み重ねをした子どもたちは、どこにいても、誰と出会っても、「違い」を壁と感じず、豊かさを受け止め、柔らかく、あたたかい未来を築いていけるのではないのでしょうか。そう願いながら、これからも活動を続けていきたいと思えます。